

令和元年度 第3回大山崎町社会教育委員会議の報告

- I 日 時 : 令和元年12月19日(木) 午後2時~同4時00分
II 場 所 : 大山崎町役場 3階 中会議室
III 出席者 : 18名
○ 出席委員(6名)
○ 欠席委員(3名)
○ 事務局(7名)
教育次長・学校教育課長・生涯学習課長・文化芸術係主幹・
公民館長・その他2名
- IV 会議名 : 令和元年度第3回大山崎町社会教育委員会議
V 内 容 : 以下のとおり

【要点】

会議は円滑に執行された。
傍聴希望者なし。

- 1 開 会 事務局
- 2 教育長あいさつ 教育次長(代読)
- 3 委員長あいさつ 委員長
- 事務局
- ※ 事前配付資料確認と当日配付資料の確認(別紙参照)
※ 大山崎町社会教育委員会議運営規則により本会議の成立を宣言
- 4 議 題 事務局
- ※ これ以降の進行は委員長が担当

(1) 令和元年度社会教育委員会議関係事業報告について

事務局—令和元年度町社会教育委員に関する内容と実績を報告

○委員長—参加された方、どうでしたか。

<令和元年度京都府社会教育研究大会>

○委員—講演の講師である清國祐二さんは、香川大学の教授で「社会情報」の編集員でもあり、社会教育のお話をたくさんされた。

お話の中で気になったのは、若者の意識調査である。「自分自身に満足している」若者は、日本では45.8%と世界最低で、アメリカでは86%ということで

ある。「自分がダメな人間だと思っているか」という問いに対しては、日本は73%で、これは世界で最高である。アメリカでは45%、韓国では35%となっている。社会教育に関係するところでは、「社会に役立っているか」という問いでは日本は中国とともに最低で、「ボランティア活動に興味があるか」という問いに日本は35.1%であった。地域総がかりと言われているが、日本ではボランティア精神を持っている人が少ないということ。自分が役に立っていると思うことで肯定的になれるという先生のお話であった。

活動紹介では、高松の空港公園で実施された、おやじの会主催のイベントについて紹介された。

その後、グループ討議を行った。京丹波、京丹後、南丹、乙訓、山城で、活動紹介をし合った。社会教育委員だけでなく体育委員や民生委員の方もおられた。

○委員長—大変詳しく紹介していただいております。

自分自身に満足せず自分のことを好きになれない、これは若い人の特徴だということで私も非常に気になった。自己肯定感が低いというところが、いろいろなところに影響しているのではないかと思う。それから、迷惑をかけず人に世話にならずに生きられると思っている人が多いということで、そんなことはないだろうと思いつつ聞いていた。先生は「勘違いをしている」とおっしゃっていた。損得勘定が先に立ち「何もメリットがない」という言葉がすぐに出てくる。「お世話になります」、「ありがとうございます」といった言葉を知っていても使えない人が多いといったようなことも指摘されていた。言葉は潤滑油だが、言えない人は、PTA等の活動に参加して大変な思いをしたようなことがない人がほとんどだということである。

また、地域で父親も参加する活動をされているが、男同士は1時間一緒に座っていても一言もしゃべらない。女の方はすぐに話をして仲良くなる。こういう違いがあると。それから、どれくらいの時間待てるかということで、竹馬を教えるとき、よそのお子さんなら丁寧に教えるが、我が子だと「なんでできないのか!」とすぐ怒る父親が多いということもおっしゃっておられた。様々なことをおっしゃっておられたが、あいさつをするということは財産で、それは「チャンスをもたらす」ということである。そのような話をされていた。

グループ討議は、宮津市、京丹波町、木津川市の方、そして私の4人であった。地域の違いがあり、木津川市では人口が増え、新入生が200人を超えるような小学校がある一方、非常に小さな小学校もあるというようなことや、PTAのない小学校があるという話もあった。学校からの連絡はどうなっているのかと尋ねると、LINEでしているということである。それから、学校で子どもの名簿がなかったり、ちょっとした怪我をしたときに絆創膏を貼ることについて親からクレームがくることもあるというお話もあった。なかなか難しい、地域の事情があるのだと思った。京丹波町では、地域の祭りで大人が子どもに教えており、そうやって地域の伝統が継承されているところもあるとのこと。

最後に、講師の清國先生が各分科会の報告を聞いてまとめをされたが、各グループで出されているお話で似ている傾向としては、色々な役の引き受け手がいないということで、PTAの会議に出たら日当を払うべきではないかという意見が出るのだということであった。良き理解者はどうやったら作れるのかということで、我々に課題としておっしゃっていた。

もう一つ、最後の方に、こどものコミュニティに学ぶことがあるとおっしゃっておられた。ロープを切るのにナイフがなかったらどうやって切るのか。そこで初めて頭を働かせる。それまでは、子どもは、大人や周りの人に言われるままに動くが何も頭の中に残らない。「ロープを切るのにナイフがない。どうしたらいい？」と大人から言われることで、コンクリートの端に擦り付けて切るなどやっとな頭を働かせる。なお、人は料理をしている時に一番頭を働かせるということであった。

<令和元年度全国（近畿地区）社会教育研究大会「兵庫大会」>

○委員長—今年全国大会と兼ねて開催され、副委員長の表彰もあったが、京都府から1人ということであった。

○委員—例年、地元地域と近畿、全国の3つの大会が同時に開催される。京都の時も同様であった。講演については、劇作家の平田オリザさんという方で、初めて知った。子どもたちの演劇と障がい者とのワークショップなど、自治体やNPOなどが合わさった多角的な演劇活動をされておられた。大変わかりやすいお話であった。

「分かり合えない文化がある」ということで、知らない人と会った時に、例えば「旅行ですか？」と声をかけるかどうか。日本では1割程度が話しかけるが、イギリスでは全然話しかけない。アイスランドでは皆話しかける、そういう話をされた。また、韓国ではまず年齢を尋ねる。一つでも上なら敬語を使う。そういう風に、国によって文化が違ふと。他にも、日本では靴を揃えなくては行儀が悪いが、靴を揃えることがそれほど重要でない国もある。そういった、文化の違いを認め合わなくてはいけないのではないかと、というお話であった。

それから、こどもの学力についての話もあり、私自身にも関りがあるのでメモをとった。学力の統計をされており、学力の高い家庭では、「家に本がある」24%、「小さいころに読み聞かせをする」17.9%、「博物館、美術館、（図書館も入れると思うが、そういう所に）子どもを連れて行く」15.9%、ただし、「勉強しなさい！と言う」とー5%、それは、学力が落ちますよ、というお話があり、やはり、本を読むということはいいことなのだと思う。それから、最近の母親は、子どもをどこに連れて行ったらいいのかわからないというが、美術館や博物館、そういうところに連れて行ったらいいということであった。

シンポジウムについては、「多様性を認め合う豊かな地域社会のための社会教育」というお話であった。4団体、全5人で話をされた。聴衆者から「豊か

な社会教育（又は地域社会）の『豊か』とはどのようなものか？」“住んでいてよかった”と思えるか、などと言うが、それを豊かな地域社会と言うのはおかしいのではないか？（豊かであるから、住んでいてよかったと思うのではないか？）堂々巡りである。」といった意見があった。色々な考えがあると思いつながりながら聞かせていただいた。

それから、最近、SDGSというような環境についての言葉があるが、頭文字ばかりでよくわからないが、そういった話もあった。

○委員長—ありがとうございました。

全国大会は3日間あり、私たちは2日目に参加させていただいた。

平田オリザさんの講演は、非常に示唆の多い講演であった。まず、色々な違いをお話された。どんな時に相手に話しかけるかという、先ほど委員がおっしゃっておられたようなことや、敬語が発達しているのは日本と韓国というようなこと。文化が共通しているからこそ起こる誤解もあると。先ほどの「靴」であるが、日本人は帰りにスッと履けるように、上がる時きちんと靴を揃えるが、韓国では「そんなに早く帰りたいのか」と受け取られてしまう。韓国では、靴は脱いだらそのまま上がるのが礼儀とされる。色々違いがあるのだなど。文化を共有しているからこそ起こる問題で、違いを顕在化させる必要があるのだと。分かり合えないところから始めるべきだとお話されていた。

それから、東京工業大学の学生の話がされた。平田先生は講師をされているが、全く議論が深まらないのだということをおっしゃっておられた。同じ土俵の者しか入ってこない。ほとんどが有名校の同じような学びを終えたものなので、議論が広がらないのだと。そういう問題があるのだなと思った。

様々なお話をされたが、時間いっぱいまでしっかりと話を聞かせていただいた。

<第41回全国公民館研究集会奈良大会

第67回近畿公民館大会

第67回奈良県公民館大会及び第31回奈良県社会教育研究大会>

○委員—公民館大会が、全国、近畿、奈良県と3つ入っており、ここに奈良県社会教育研究大会も加わり、社会教育委員もこの中に入り、大掛かりにされた大会であった。

講演の講師が千田稔さんの予定であったので期待していたが、当日は、西山さんという方であった。お話は大変おもしろく、東大寺の大仏や聖武天皇のお話など、興味深い内容であった。やはり、社会教育と関係するお話をしなくてはと思われたのだと思うが、聖武天皇が大仏を作る時に、1本の草を持って来た人にも、一握りの土を持って来た人にも、手伝ってもらおうと。すべての動物、植物とともに世の中を作りたいと言われたと。社会教育というところから、このお話をされたのではないかと思う。

分科会では「京都」のところへ行かせていただいた。網野の公民館長のお話

で、やはり、公民館は地区によって違うのだなと感じた。京丹後市は6つほどの地域が合併したが、そのうちの一つ、網野の公民館のお話であった。網野の中に12の地区の公民館があり、地域によって色々と異なるということを勉強させていただいた。実践報告を行ったが大山崎町も負けていないと感じた。

○委員長—奈良県公民館大会と社会教育研究大会が同時に開催されており驚いた。例年、同様にされているということである。

私も「京都」の分科会に参加させていただいた。京丹後市では、人口が減少しているが世帯数は増加する、いわゆる核家族化が進んでおり、介護施設に入所する方が増えているといった地域の特徴を話された。

◎ 各委員が承認

(2) 令和元年度生涯学習課関係事業報告について

事務局—「生涯学習・スポーツ振興係」、「文化芸術係」、「歴史資料館」、「中央公民館」、「町体育館」の順に令和元年度実績を報告

*質疑応答

<大山崎町地域未来塾「ときめきクラス」について>

○委員—未来塾のことでお尋ねする。初めてのことで参加者が少ないことはわかるが、未来塾がときめきチャレンジ推進事業（以下、「ときめきチャレンジ」とする）、いわゆる放課後子ども推進事業の中に入っていることに少し違和感がある。放課後の子どもの学習ということでは同じだが、中学校に学校支援コーディネーターはいらっしゃるのか。長岡京市であれば、長岡第三中学校に学校支援の方がおられるようである。そういう方がおられるところでは、その方を中心に学校とPTAが合わさって未来塾をしている。そこに、社会教育委員が関係しているところも多数ある。というのも、社会教育委員の近畿大会の発表の際、西ノ岡中学校の発表や、他の実例、実践報告においても社会教育の関係で未来塾について話を聞いている。

今のメンバーでは未来塾は困難ではないかと思う。現在、小学校のPTAの方が入っておられるが、中学校の学校支援やPTAの方、大山崎町なら社会教育委員に入っておられる中学校のPTA役員のような方が、他所では頑張っておられる。担当者は放課後子ども推進事業と同じでもかまわないが、メンバーとしては、中学校の子どもたちの学習を支援するのであればもう少し違うメンバーで、教え役の大学生を含め、一緒にどうしたら参加者が集まるのかといった話が必要に思う。

事務局—正直、参加人数について9月以降の体制は芳しくない。ご意見をいただきながら色々と手立てを考えているところである。学習支援の方には現地に行っていたり、中学生の参加者の方々にプリントを渡している。支援いただく方の拡充という点では、ご指摘のとおりかと思う。

○委員—未来塾では参加者が集まらなかったようだが、8ページのスポーツクラ

ブ事業でも参加者が集まらずに中止とある。子ども向けの事業で開催したものはどんな様子か。11月に関しては成り立ったのか。集まり具合はどうか。ときめきチャレンジの英語交流会は大人向けの事業か。

事務局—ときめきチャレンジの英語交流会は子ども対象である。事前に登録していただき、参加する子どもや開催する回数はあらかじめ決まっている。その子たちが、定期的に図書室へ集まってくるような形を取っているので、単発の開催日に来たい子だけが来るというものではない。わくわくクラブの秋のハイキングは、広く募集をかけ、結局応募者がなかった。いわば、単発の事業に参加者がなかった、という結果となった。

○委員—参加者が集まらなかった事業に関しては、それでよいのか。

事務局—行先なのか時期なのか、そこは今後の課題である。わくわくクラブについては、季節ごとのイベントを色々させていただいており、実績には上がっていないが、12月のクリスマスの交流事業では70人超の親子に参加をいただいている。次にはスキーも予定しており、チラシが中心になるが参加者を募るようにしている。

○委員—委員がおっしゃっている事業は参加者が集まっている。英語交流会も、次に委員にお世話になる食育についても、小学校を対象にしている事業で、同じ事業である。参加者も集まっている。しかし、未来塾はちょっと異なる。まだ始まったところであり、ときめきチャレンジでも最初は人が集まらなかった。今は定着し、多数来ていただいている。催しによっては定員オーバーになることもある。

○委員—いい内容なのに集まらないのであれば、周知が原因かと思われる。原因がどういったところにあるのか気になったのでお尋ねした。

<第58回町民体育祭について>

○委員—事情はよく承知しているつもりだが、体育祭を中止したことにより住民の方や関係者から意見は出ていないか。あればお聞きしたい。最初の日、台風が来ることが明らかであり延期はやむを得なかったが、順延した明るく日というのは、例えば、開催して、途中で天候不良になったらその時点で終了するなど、形の上では大会をやったということが可能だったので個人的には思う。中止についてとやかく言うつもりはまったくないが、各住民からの協力というのが希薄になってきており、ざっくりばらんに言うと、中止になってよかったと思っている人も結構いるような感じもしないではない。何か反応があったのなら教えていただきたい。

事務局—中止したことにより「何故中止したのか」というご意見はなかった。中止の判断については、最終は町の決定によるものだが、体育協会役員と協議をさせてもらう中で中止になった。14日の朝に現場を見てきたが、グラウンドの状態を見たときに、中止にして良かったと思った。全体に、かなり水たまりが出来ており、各自治会の方がテントを張るにも長靴をはかなくてはならないコンディションであった。前日の中止の判断は致し方なかったと思われる。

○委員—グラウンドコンディションが特に悪かったということで、そこまでは見ていなかった。朝の天候だけで見ると、前日の判断は早いように感じた。当然、前日に決めた方が事前の準備もあるのでそれはそれで良いと思う。

事務局—中学校の水はけの悪さというのが影響しているのは否めない。改善の余地はあるのかもしれないが、グラウンドの改修には相当な費用がかかる。今後どうやるのかといった検討はあろう。

<歴史資料館の連続講演会について>

○委員長—13 ページに連続講演会の参加者の写真があるが、実に多くの参加があったようである。9月、10月の連続講演会も同じような参加者があったのか。

事務局—11月の歴史講演会1回、2回、3回それぞれ110名以上で、ふるさとセンター3階のホールは満席状態でご来場いただいている。さかのぼって9月、10月の講演会についても60名を超えるご参加をいただいております、ご盛況いただいたかと思う。

○委員—全て参加したが、本当に参加者が多かった。80歳を超えるお年寄りの方で、勉強熱心な方が多かった。ブームで、歴史の話で麒麟や光秀の名前が出てくるととても人が集まる。

○委員長—参加者が多いのは、大山崎町以外からも来ておられるのであろう。「○○でも会ったなあ」という声が聞かれた。あちこち渡り歩いている人がおられるようだ。

◎ 各委員が承認

※ これ以降の進行は事務局が担当

5 その他

社会教育施設の使用料等の改定について事務局から報告

6 閉会あいさつ

副委員長